



スポーツ実施率向上への取り組み

文部科学省では、第2期スポーツ基本計画において「成人のスポーツ実施率を週1回以上が65%程度(障害者は40%)となることを目指す」としています。

スポーツを「する」「みる」「ささえる」といったさまざまな形で積極的に参画し、スポーツを楽しみ、喜びを得ることで、それぞれの人生が生き生きとしたものとなることを期待しています。

スポーツ実施率の現状

令和2年にスポーツ庁が実施した調査によると、国民のスポーツ実施率は59.9%(障害者は24.9%)となっていました。

市でも、スポーツ実施率と現状の課題を把握し、健康増進と体力向上のための具体的な方策と目標を設定するため、今年1月に市民アンケート(無作為抽出1,500人、回答率50.9%)を実施しました。その結果、市民のスポーツ実施率は40.0%で、国の調査を大幅に下回る結果となりました。これは、新型コロナウイルスの影響による緊急事態宣言やまん延防止等重点措置により、スポーツ施設の閉鎖やクラブ活動の自粛などが大きな要因であると考えられます。

しかし、週1回以上スポーツを行っていない人でも「運動・スポーツは大切」「機会があれば行いたい」と回答し

た人が多く、スポーツの大切さを感じているが、仕事や家事が忙しいなど、さまざまな理由により、スポーツを行っていないという人が多いことが分かりました。

スポーツ実施率向上のためのスポーツイベントの見直し

市では、市民の健康増進と青少年の育成などを目的に、これまで多くのスポーツイベントを開催してきました。しかし新型コロナウイルスの影響により、この2年間、ほとんどのイベントが中止となり、スポーツイベントのあり方を見直す必要が生じてきました。そこで体育振興課では、コロナ禍においても安心して参加することができ、さらには、文部科学省の掲げるスポーツ実施率を達成し、共生社会の実現を目指す新たなスポーツイベントを開催する準備を進めています。

あさひスポーツフェスティバル

誰でも自由に、自ら進んでスポーツに親しみ、スポーツを通じて健康増進と地域の絆を育むことで、住み続けたいなるまちづくりを目的とした「あさひスポーツフェスティバル」を令和4年度からスタートする予定です。市内複数のスポーツ施設などで、家族や友人と気軽に楽しめるニュースポーツや、障害がある人でも参加できるパラスポーツ、スポーツ講演会などを企画しています。複数の施設で開催することで人を分散し、密を回避しながら、安心してスポーツを楽しみ、健康長寿社会の実現と多様性を尊重した持続可能なスポーツイベントを目指します。

あさひ輝いた人々

第41回

医師として公人として 地域医療の推進に 生涯をささげる

いとう まさあき
伊藤 政秋 (1913~1982年)



伊藤政秋は、医師として地域医療の発展に尽くした人物です。

大正2(1913)年、旭町に生まれ、昭和13(1938)年に日本医科大学を卒業し、警視庁の防疫医として働き始めました。その頃、旭町の新田地区は、地元の医療機関がなく無医地区となっていました。政秋は亡き父が海上郡長を務めていたことから、医師誘致運動の切り札として地元から強い要請を受けました。

地域の困窮を感じた政秋は、東京での仕事を辞め、地元に戻り昭和15(1940)年に伊藤医院を開設しました。近隣の患者はもとより、夜間急患の対応や、遠くて通院できない患者の往診、貧困者への無償治療など、昼夜を

問わず医療に励みました。こうして地域の厚い信任を得て、昭和22(1947)年に旭町議会議員に当選し、昭和23(1948)年には議会議長となりました。

また、昭和22(1947)年には海上郡医師会の設立会員としても活躍しました。特に看護学校の設立のため、学校の校舎として自宅を提供し、講師として教育にも当たりました。ほかにも、内科医が対応に苦勞していた精神科の患者を受け入れるために、昭和30(1955)年には精神科専門の医療法人を開設し、治療する人材を確保するために全国各地を訪ねました。

昭和45(1970)年に、多くの市民から支持を受け旭市長に当選し、昭和53(1978)年まで2期8年にわたり市政に携わりました。昭和46(1971)年には待望の看護学校の用地を取得し、市長として、また医師会顧問としてその建設を実現させました。

昭和57(1982)年、68歳で亡くなるまで、地域と医療の発展に貢献した人生でした。



中央児童遊園の蒸気機関車引渡式で挨拶する政秋